福岡市埋蔵文化財調査報告書　第996集

箱崎32

－箱崎遺跡 第53次調査－

２００８

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、やむをえず破壊される遺跡については発掘調査を行なって、往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成18年度に行ないました、箱崎遺跡第53次調査の成果について報告するものです。本書が皆様の地域の歴史に対する理解の一助となり、また歴史学、考古学上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、費用の負担など多大な御協力を戴きました、岡部産業株式会社をはじめとする関係各位に深く御礼申し上げます。

平成20年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田 裕嗣

－例　言－

・本書は福岡市教育委員会が2006年10月10日から12月１日にかけて行なった箱崎遺跡第53次調査（東区箱崎３丁目2442－1）の報告である。調査は蔵冨士寛が担当した。
・本書の編集、執筆は蔵冨士が行ない、遺物の実測、図版のトレースについては米倉法子の手を煩わせた。
・本書における方位は磁北であり、遺構についてはSE（井戸）、SK（土坑）、SD（溝）、SP（柱穴）等の略号を使用している。
・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目　次

Ⅰ．はじめに…… 1

１．調査に至る経緯…… 1

２．調査の組織…… 1

Ⅱ．位置と環境…… 2

Ⅲ．調査の記録…… 4

１．調査の概要…… 4

２．遺構・遺物…… 5

Ⅳ．まとめ…… 10

挿　図　目　次

図１　周辺遺跡（1/25,000）…… 2
図２　調査地点（1/2,000）…… 3
図３　調査区の位置（1/400）…… 3
図４　主要遺構配置（1/200）…… 4
図５　遺構配置（1/150）…… 5
図６　SD064・065土層（1/40）…… 6
図７　SD064出土遺物（1/3）…… 7
図８　SD065出土遺物（1/3）…… 7
図９　SE120（1/60、1/3）…… 8
図10　SE130（1/60、1/3）…… 9
図11　SK113（1/40、1/3）…… 9
図12　その他の遺物（1/3）…… 10

図　版　目　次

図版１　上　調査区西半（南西から）
中　調査区東半（西から）
下　調査区東半（南西から）
図版２　上　SD064・065（北から）
中　SD064・065（北西から）
下　SD064・065（南東から）
図版３　上　SD064・065土層（南東から）
中　SK113（北東から）
下　SE026（北西から）
図版４　上　SE120・130（南東から）
中　SE120（南東から）
下　SE130（南東から）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成18年７月21日、岡部産業株式会社より、東区箱崎３丁目2442―１における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財課に対し、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地（箱崎遺跡）内であることから、埋蔵文化財課では確認調査を行ない、現地表下60cmで遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、建築による遺跡への影響は避けられないということになり、発掘調査による記録保存で対応することとした。

調査の開始は平成18年10月10日。12月１日にすべての作業を終了した。調査にあたって、岡部産業株式会社をはじめとする関係各位には、多大な御協力をいただいた。記して感謝したい。

2．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　岡部産業株式会社
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　平成18年度　埋蔵文化財第１課　課　　長　山口譲治
　　調査係長　山崎龍雄
　　平成19年度　埋蔵文化財第１課　課　　長　山口譲治
　　調査係長　米倉秀紀
調査庶務　平成18年度　文化財管理課　鈴木由喜
　　平成19年度　文化財管理課　鈴木由喜
調査担当　蔵冨士寛
調査作業　安東昌信　草場恵子　許斐拓生　酒井康恵　渋谷一明　芹沢淳子　為房紋子　徳山孝恵
　　中村恵子　西村寿美枝　福島　大　増田ゆかり

遺　跡　名	箱崎遺跡　第53次				
遺跡調査番号	0648		遺　跡　略　号	HKZ-53	
地　　番	東区箱崎3丁目2442-1		分布地図番号	34　箱崎	
開　発　面　積	830㎡	調査対象面積	529㎡	調査面積	495㎡
調　査　期　間	2006.10.10～2006.12.1				

Ⅱ．位置と環境

箱崎遺跡は多々良川・宇美川下流域に位置し、博多湾沿いに連なる砂丘上に存在する。弥生時代から近世にいたる複合遺跡である。箱崎遺跡から南へ延びる砂丘上ではこの他、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群といった遺跡が確認されている（図1）。

調査地点は遺跡の北側に相当する。周辺では調査地点の北側で、第6・23・41次調査、西側では第29次の調査がそれぞれ行われている（図2）。第6次調査では12世紀後半～13世紀にかけての井戸、土坑が検出されている（宮井1996）。第23次調査では、12世紀、13世紀後半～14世紀にかけての遺構が確認されている（長家編2002）。第41次調査では12世紀後半～13世紀にかけての井戸、土坑といった生活址に加えて、土坑墓、木棺墓といった埋葬址も確認されている（中村編2005）。第29次調査においても、12世紀後半～13世紀、14世紀後半の遺構がそれぞれ確認されているようだ（松浦編2004）。このように周辺の調査事例をみれば、1）調査区周辺では12世紀後半に集落の形成が開始し、13世紀まで続くこと、2）以後、生活の痕跡は低調となり、再び盛んになるのは近世になってからのことであること、がわかる。

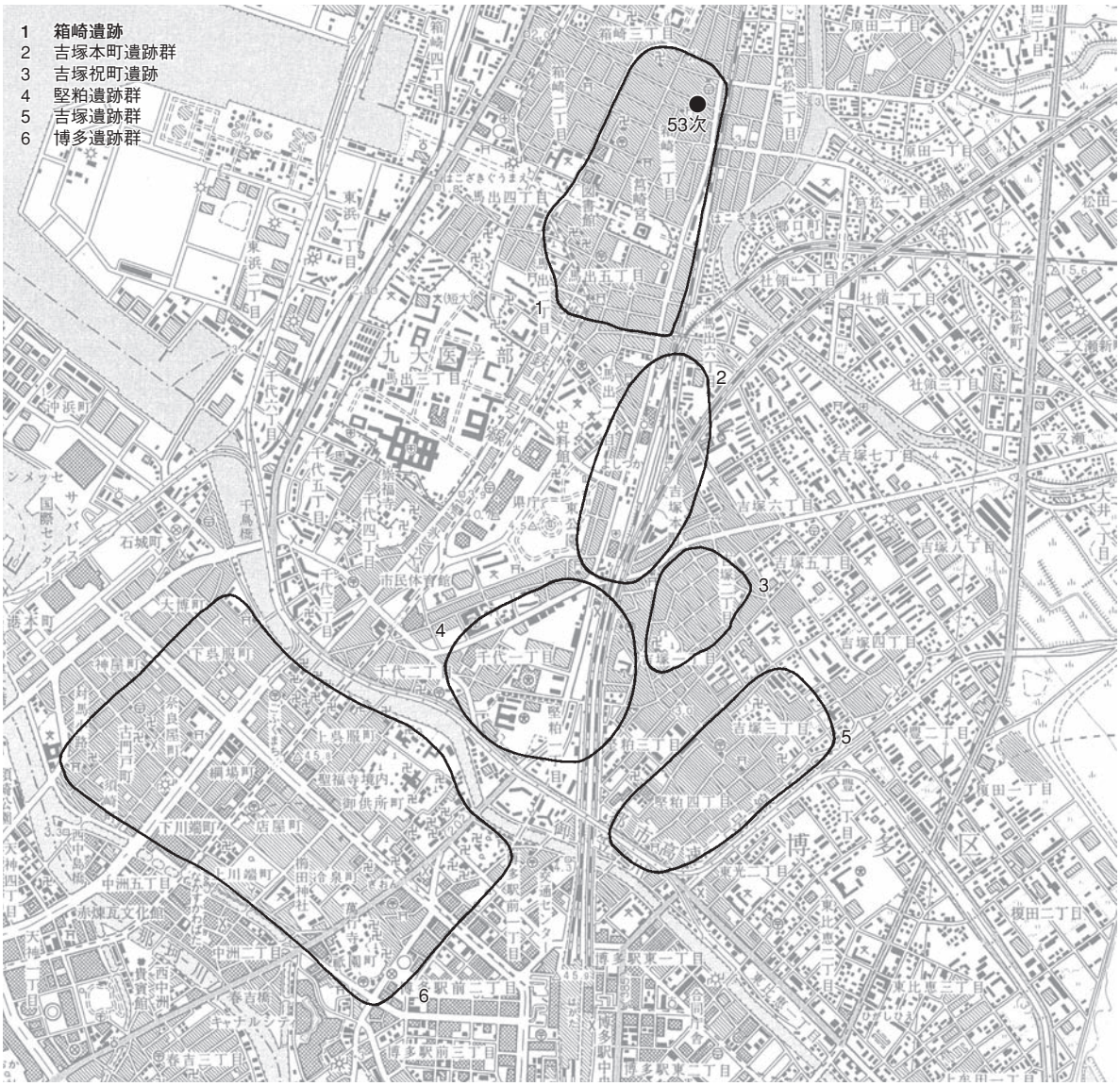


図1　周辺遺跡（1/25,000）

文　献

中村啓太郎編2005『箱崎24』―箱崎遺跡第39・41・44次調査―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第854集

長家　伸2002『箱崎12』―箱崎遺跡第17次・第23次調査報告―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第704集

松浦一之介2004『箱崎19』―箱崎遺跡第29・31次調査―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第813集

宮井善朗1996「第６次調査の記録」『箱崎遺跡４』―箱崎遺跡第６次・７次調査報告―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第459集

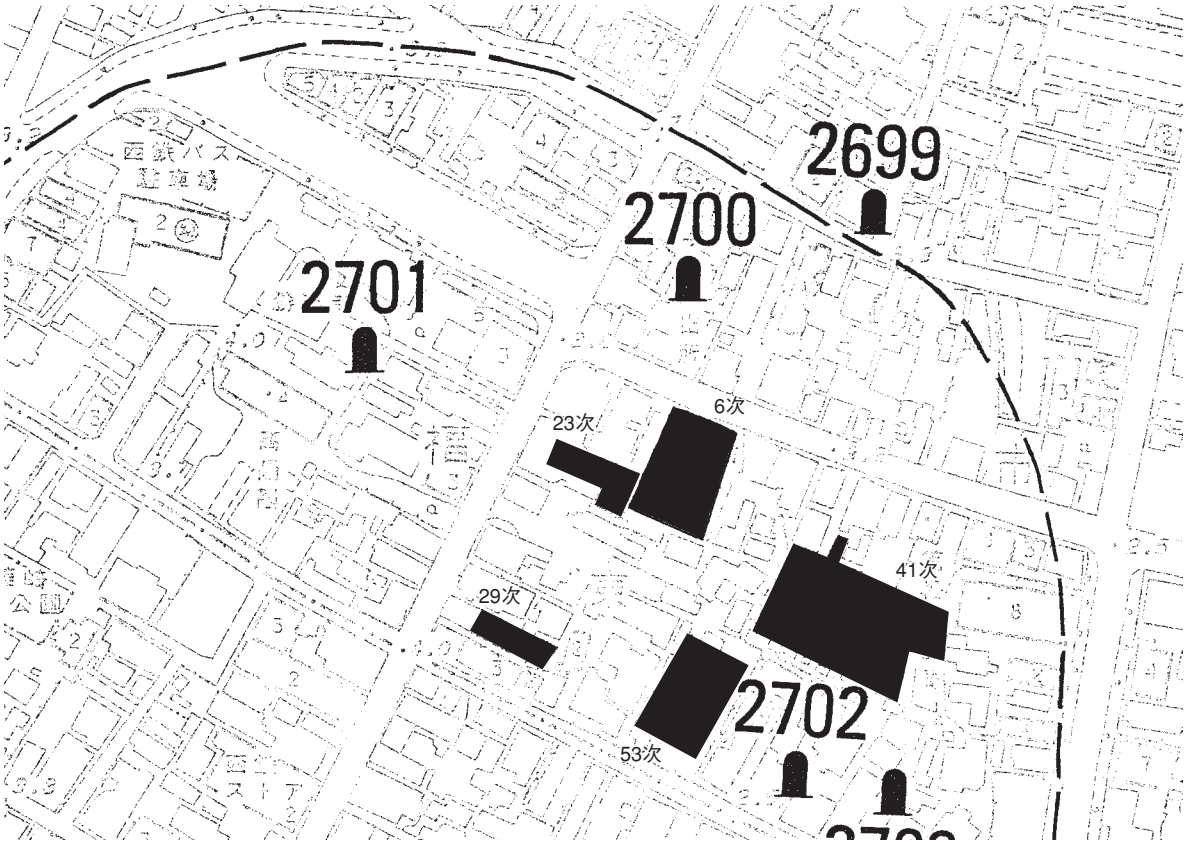


図２　調査地点（1/2,000）

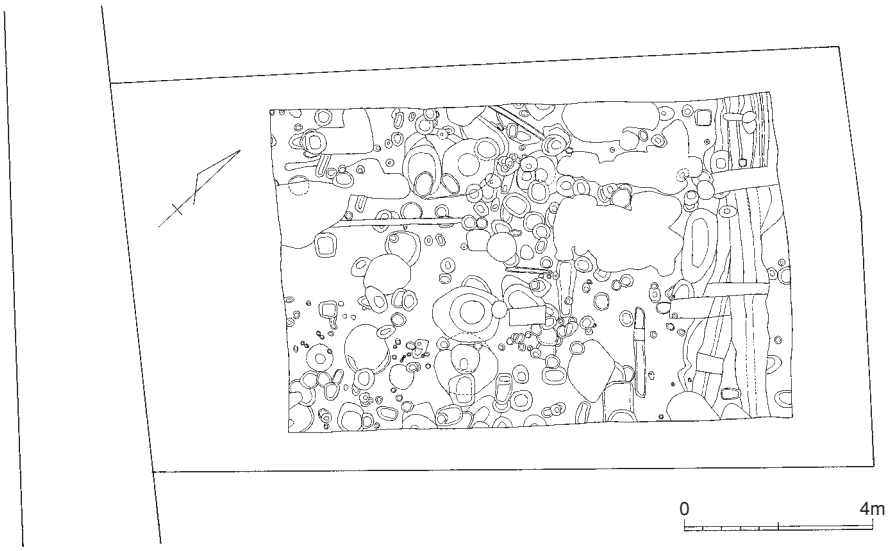


図３　調査区の位置（1/400）

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

調査はまず、重機による表土剥ぎより開始した。表土を除去した後、標高2～2.5m前後の位置で確認した砂丘（黄褐色砂質土）上を遺構面として設定し、調査を開始している。排土処理の関係で、調査区を東西に二分して調査を行なっており、調査途中に土砂を反転している。

今次調査の検出遺構には、溝、井戸、土坑、ピットがある（図5）。遺構の大半は近世段階のものであり、近・現代の撹乱（アミ部分）も多い。近世段階の顕著な遺構として、SD064・065、SE003・026・028といったものを挙げることができるだろう。これら遺構の内、特に大形の遺構であるSD064・065のみ、今回の報告の対象とした。

確実にそれ以外の時期に属すると思われる遺構はごく限られる。数少ないこれら遺構の中に、中世前半に位置付けることのできるSE120・SE130がある。SK113も中世段階にさかのぼる可能性のある遺構と考えている。いずれも調査区の西側で検出している（図4）。

出土遺物には、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦質土器、土師器などがあり、総量でコンテナ17箱分である。以下では、各遺構の所見、および出土遺物について述べる。

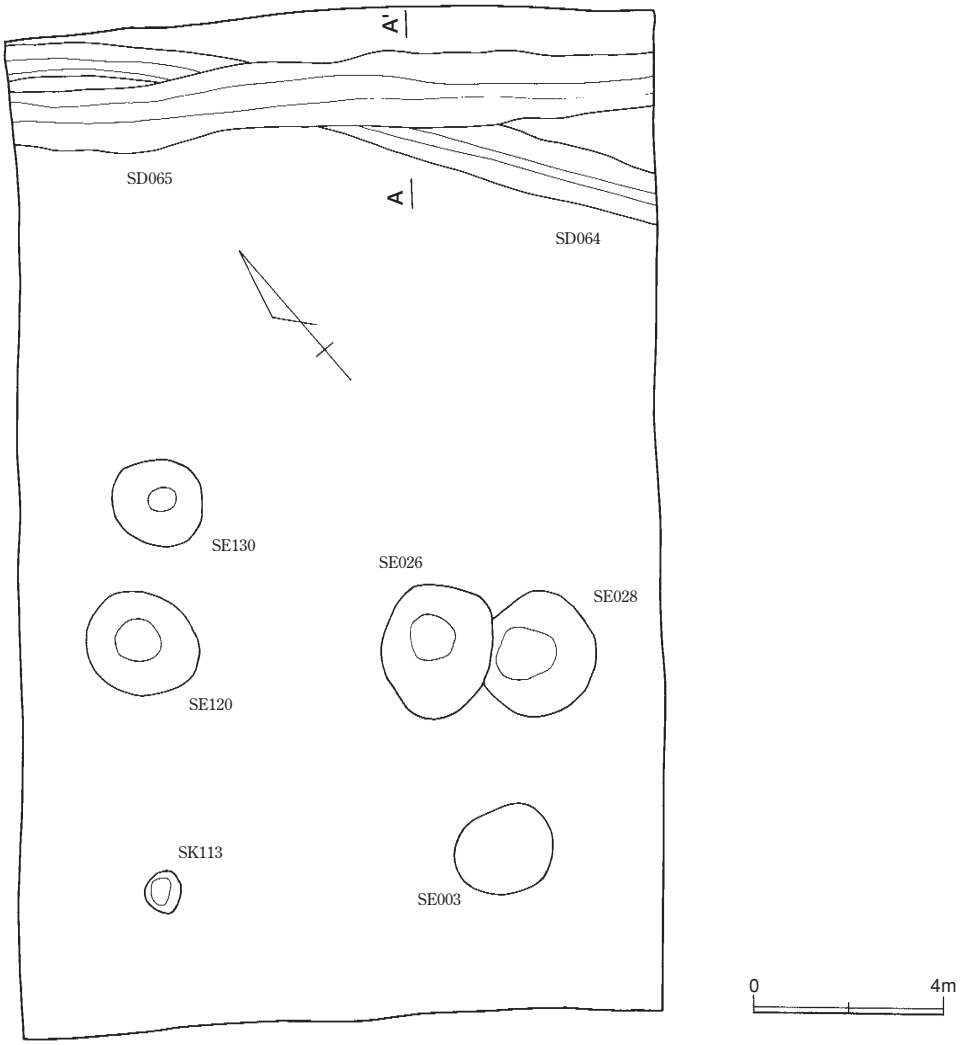


図4　主要遺構配置（1/200）

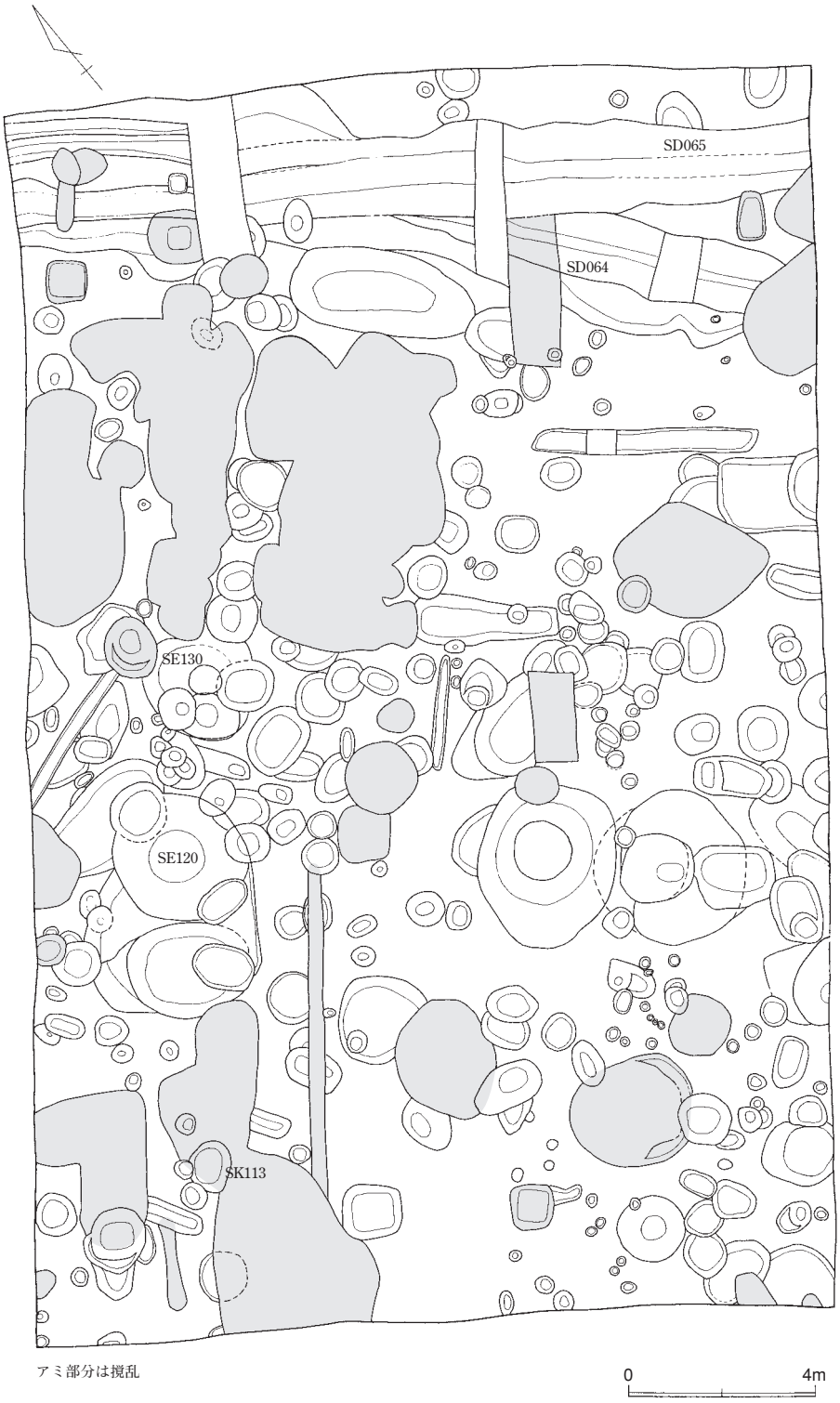


図5　遺構配置（1/150）

2. 遺構・遺物

(1) SD（溝）

今次調査では、調査区北東側で大形の溝2条を検出した（図4）。SD064、SD065がそれで、互いに切り合いの関係にあり、共に南東－北西方向に走っている。溝については、SD064、SD065についてのみ、以下に述べることにする。

その他にも小規模の溝状遺構をいくつかみることができるが、いずれも浅く、部分的にしか残存していない。出土遺物をみても、どの溝も近世以降に位置付けることができるものであり、これら溝は今回の報告からは省いている。ただ、SD064・065と平行もしくは直交するものも多いことには注意を払う必要があるかもしれない。

SD064

調査区の北東側を走り、後述するSD065に切りこまれている。方向をN－38°－Wにとるが、西へ向かうにつれて湾曲しており、一部ではSD065に平行する。溝の幅は1.5ｍほどであるが、南側の掘り方が一部段状を呈しており、本来は更に幅広のものであったのだろう。深さは0.8mを測る。溝の断面（図6）をみれば、南側は一部段状を呈しており、幾度か掘削が行なわれた可能性を考えておきたい。下記に示した遺物のほか、多くの国産陶磁器が出土しているが、これら遺物をみればこの溝は近世をさかのぼるものではないだろう。

出土遺物（図7）

1は滑石製石鍋の鍔部片。半ばに穿孔が認められる。破面は一部研磨されており、再利用がはかられたものと考えられる。2・3は土錘。

SD065

調査区の北東側を走り、SD064を切りこんでいる。時期は当然SD065より新しい。溝は方向をN－50°－Wにとり、ほぼ直線的にはしっている。幅は2mほど。こちらの溝も断面をみれば（図6）、壁面が段状をなしており、再掘削がなされた可能性をみておきたい。また、溝がある程度、埋没した後にも、溝内の堆積をみれば、1・2層にみられるように、再び掘削され溝としての機能を果たしていたようである。溝の使用期間は長く、近代までの遺物を含む。

出土遺物（図7）

1・2は擂鉢。1は台部を有し、時期的にも新しいものである。3～5は土錘。6は石錘である。滑石製で、紐掛用のつまみを有する。石鍋等、滑石製品破片の転用品である。

(2) SE（井戸）

井戸は合計5基を確認した。調査区の南半にあり、出土遺物をみれば、うち東側の3基が近世以降、西側の2基が中世前半に位置付けることができる（図4）。

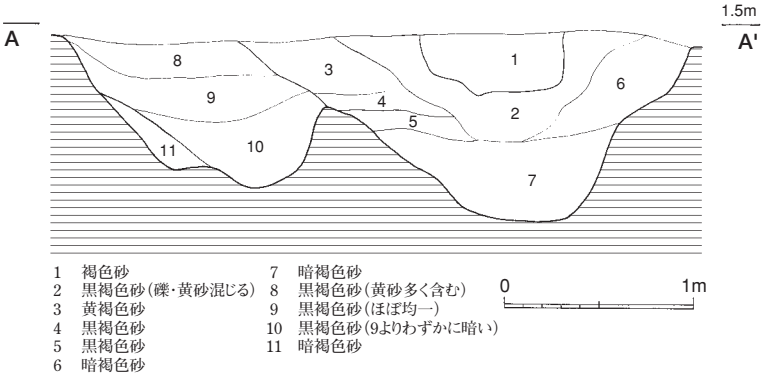


図6　SD064・065土層（1/40）

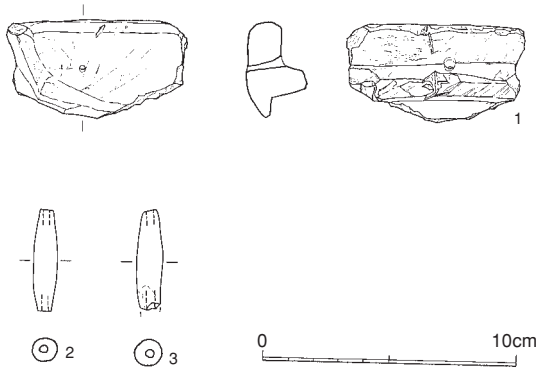


図7　SD064出土遺物（1/3）

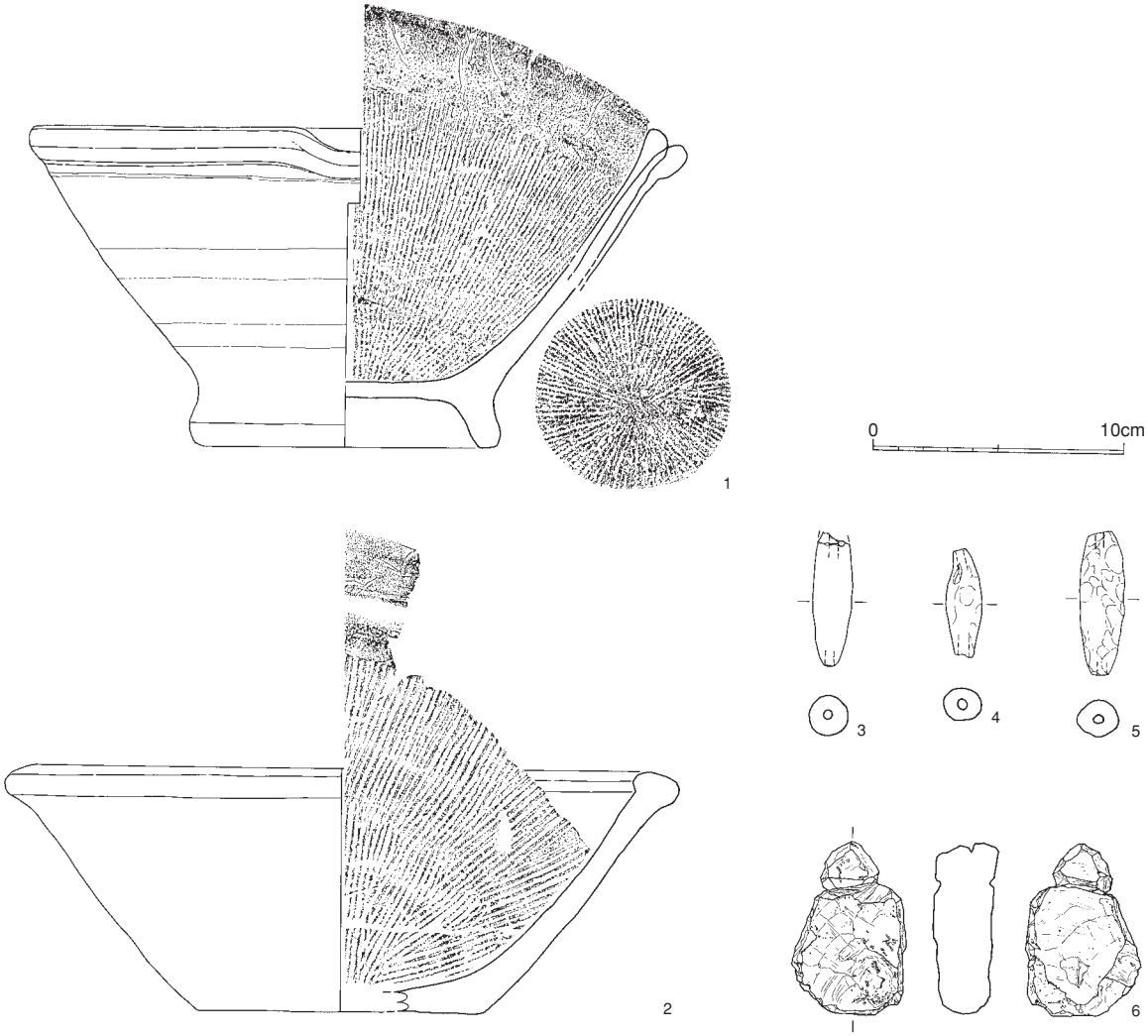


図8　SD065出土遺物（1/3）

SE120（図9）

調査区の中央やや南西寄りで検出。多くの遺構に切り込まれており、当初遺構の存在に気が付かなかった。しかし、井戸の埋土は淡褐色を呈しており、SE003・026・028や他の近世遺構との違いは明らかである。井戸の掘り方は径2mの円形を呈し、標高1.8m前後まで掘り下げの後、径1mほどの井筒部分を掘削している。標高0.5m近くまで掘り下げたが、湧水と壁面崩落により、これ以上の図化を行なうことができなかった。近世の陶磁器（図9－3）も出土しているが、これは混入とみたい。特に井筒部分の掘り下げでは、何れも細片が主であるが、出土するのは中世段階の陶磁器ばかりである。出土遺物より13世紀前半に位置付けることができるだろう。

出土遺物

1は越州窯系青磁壷口縁部片である。口径（復元）10.0cmを測る。2は竜泉窯系青磁皿である。内面見込み部分にはヘラ描文を有している。口径（復元）10.6cmを測る。

SE130（図10）

調査区の中央やや南東寄り、SE120の北側で検出した。SE120と同じく井戸の埋土は淡褐色を呈しており、他の近世遺構との違いは明白である。掘り方は径2.2mの円形を呈し、標高1.3mまで掘り下げた後、径1mほどの井筒部分を掘削している。井戸の底面は標高0.5mで、周囲にはわずかに有機質が付着していた。このことから井筒には木桶が使用されていたものと考えられる。出土遺物をみれば12世紀後半の時期が想定できる。

出土遺物

1・2は白磁椀口縁部片である。1は口縁端部を水平に仕上げている。椀Ⅷ類に相当する。2は玉縁を有する。椀Ⅳ類に相当する。3は瓦器椀底部片。4は土師杯。口径（復元）15.8cmを測る。底部は糸切りによる。5は土錘。

(3) SK（土坑）

土坑は調査区内の各所でみることができた。しかし、時期はいずれも近世以降のもので、ここで説明は行なわない。その内1基、中世段階にさかのぼる可能性のあるSK113について、報告したい。

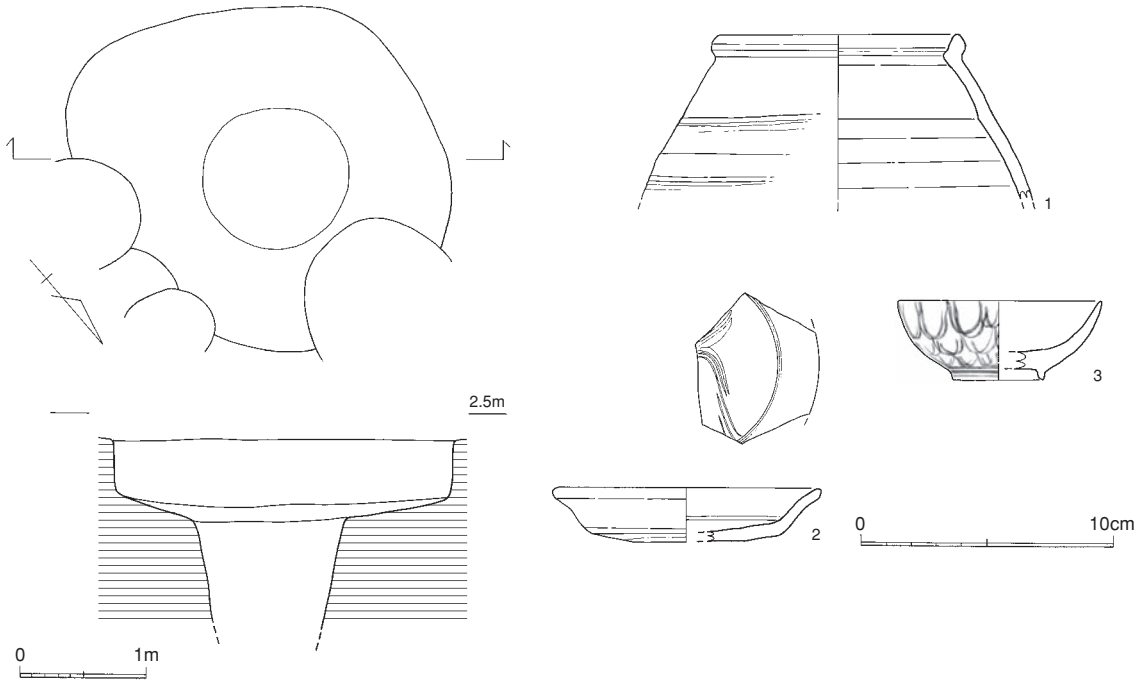


図9　SE120（1/60、1/3）

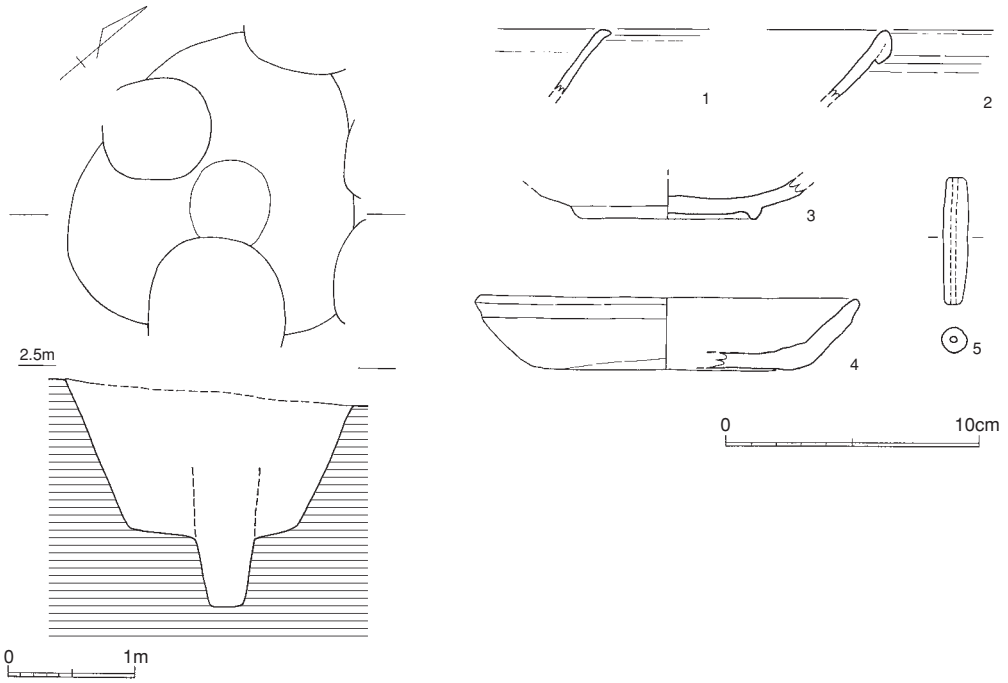


図10　SE130（1/60、1/3）

SK113（図11）

調査区南側で検出したもので、平面は径1mほどの円形を呈する。深さは0.8mで、壁の立ちあがりは垂直に近く、底面は平坦である。埋土上部には流れ込むような形で、土器、礫等が検出できた。この中には近世段階の陶磁器（図11－１）も含まれており、出土状況をみればこの土坑も近世段階に位置付けるべきであろうが、1）埋土がSE120等の中世以降と似ること、2）他の近世遺構ではほとんど混じらない、中世段階の土器が以外に多く出土していること、からこの土坑が中世段階にさかのぼる（12世紀後半）ことも考えておきたいと思う。

出土遺物

２は瓦器皿である。口径10.2cmを測る。３は白磁椀底部片。細く高い高台部を有する。椀Ⅷ類に相当する。

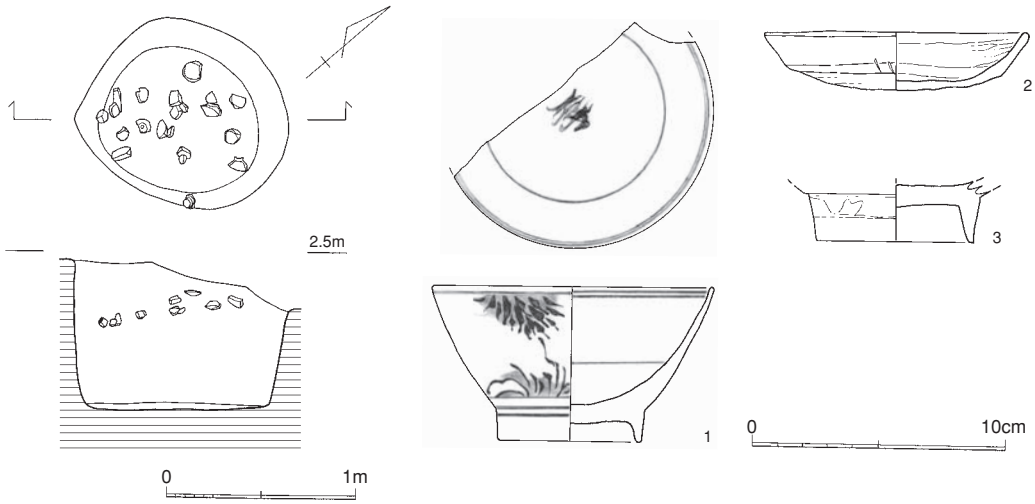


図11　SK113（1/40、1/3）

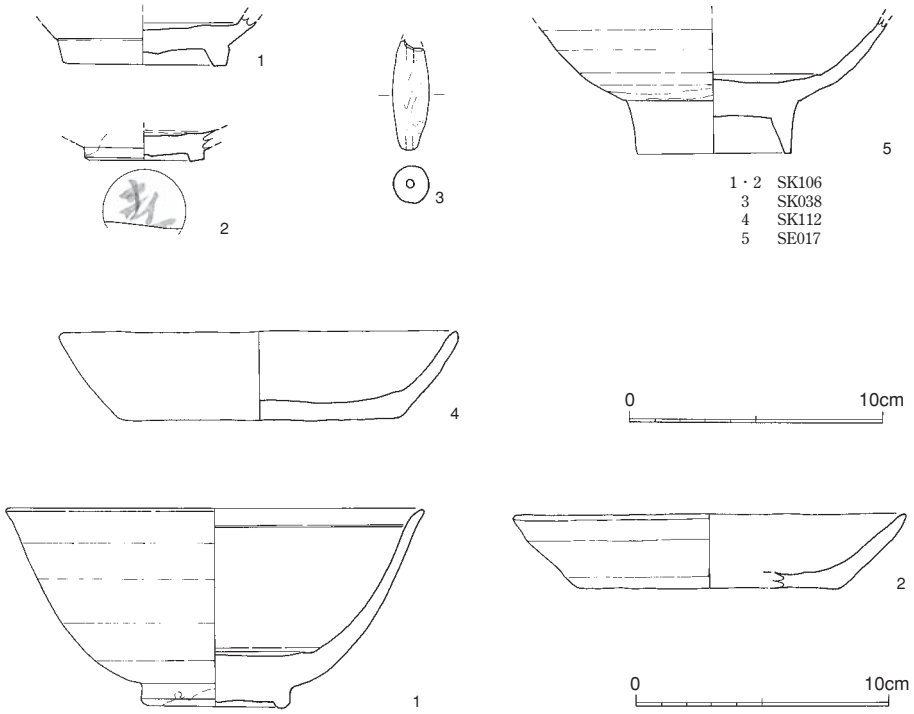


図12　その他の遺物（1/3）

(4) その他の遺物

発掘をおこなった各遺構から出土する遺物は近世以降のものが、大部分を占め、中世以前のものが数少ない。ここでは、各遺構、撹乱等から出土した特徴的な遺物について、報告する（図12）。

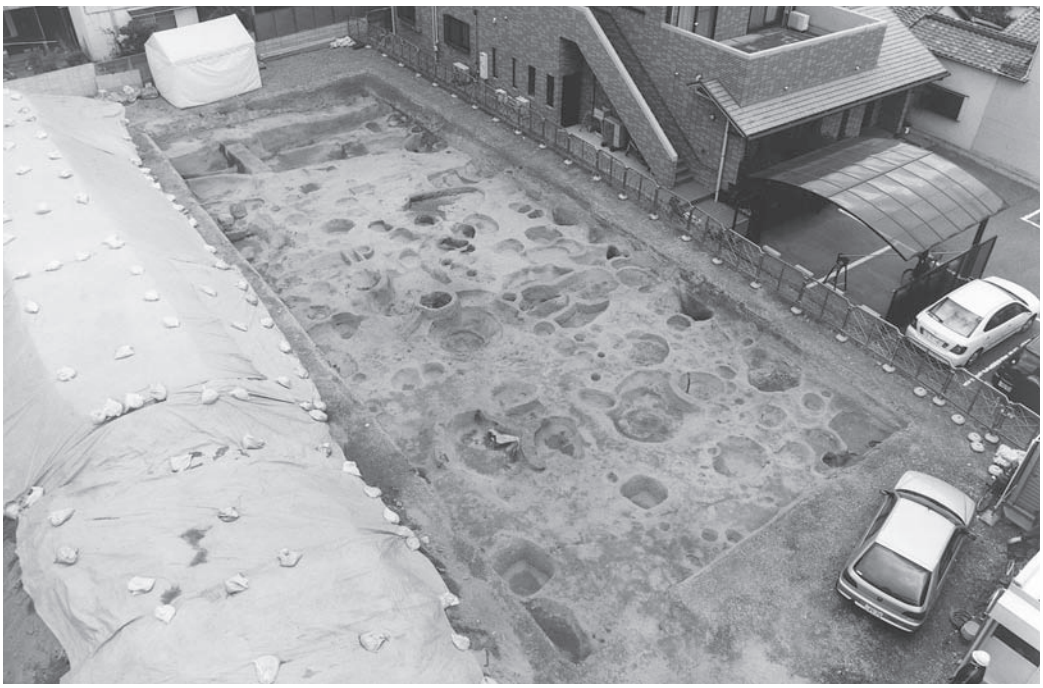
1～5は遺構出土のものである。何れも流れ込みの遺物で、遺構の時期を示すものではない。1・2・5は白磁椀底部片である。1・2は低い高台部を有し、内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。5は細く高い高台部を有する。1・2は椀Ⅷ類、5は椀Ⅴ類に相当する。3は土錘。4は土師杯。口径15.8cmを測る。底部は糸切りによる。6・7は撹乱出土の遺物である。1は竜泉窯系青磁椀。高台部は低く、底面は厚い。椀Ⅰ類に属する。2は土師杯。口径15.4cmを測る。底面は糸切りによる。

Ⅳ．まとめ

今回の調査地点は、近・現代の撹乱も多く、遺構の遺存状況は良いものではなかった。大半の遺構は近世段階のもので、中世にさかのぼりうるものは、2基の井戸（SE120・SE130）などごく少ない。中世の遺構はいずれも12世紀後半～13世紀前半に位置付けることができ、これは周辺における調査事例と比較しても矛盾はない。

今次調査地点が砂丘の高所にあたること、そして中世以前の遺構は井戸等、掘りこみの深いものしか残っていないことを考えれば、中世以前の遺構は、削平により既に失われてしまっている可能性が高いものといえるだろう。

調査区西半（南西から）



調査区東半（西から）

調査区東半（南西から）

図版2

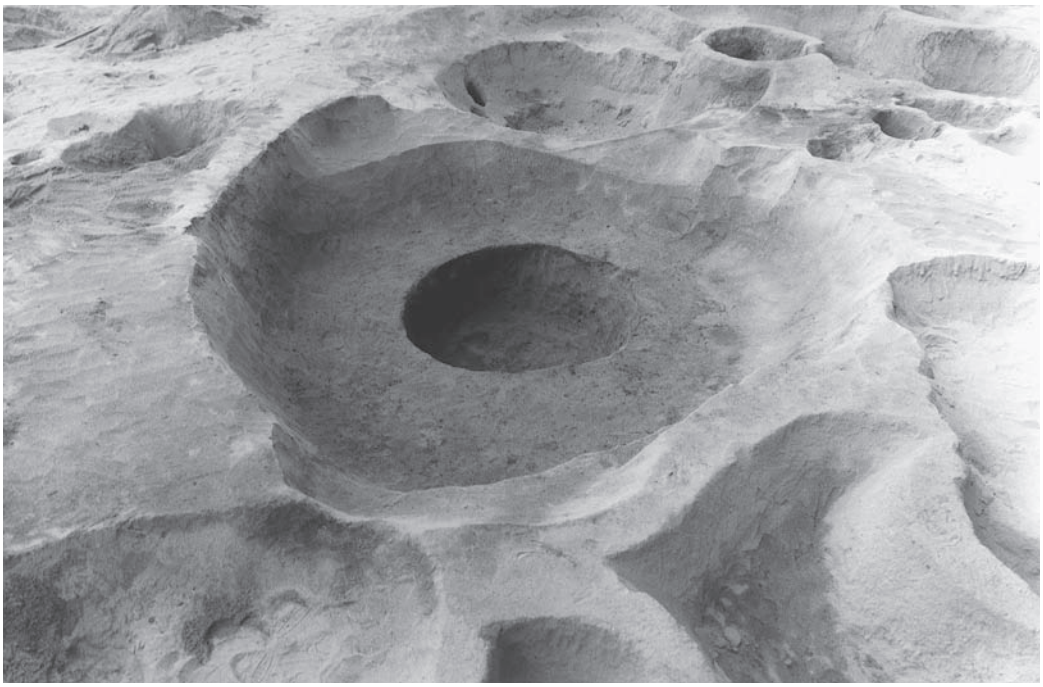
SD064・065（北から）

SD064・065（北西から）

SD064・065（南東から）

SD064・065土層
（南東から）

SK113（北東から）



SE026（北西から）

図版4

SE120・130（南東から）

SE120（南東から）

SE130（南東から）

報告書抄録

ふりがな	はこざき
書名	箱崎32
副書名	箱崎遺跡　第53次調査
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第996集
編著者名	藏冨士　寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1
発行年月日	平成20年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
箱崎遺跡（はこざき）	福岡県福岡市東区箱崎3丁目2442-1（ふくおかけんふくおかしひがしくはこざき）	4013	2639	33° 37′ 8″	130° 25′ 31″	2006.10.10 ～ 2006.12.01	495	共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡（はこざき）	集落	中・近世	溝・井戸 土坑	国産陶磁器 輸入陶磁器 瓦質土器	

要旨

今回の調査地点は、近・現代の撹乱も多く、遺構の遺存状況は良いものではなかった。大半の遺構は近世段階のもので、中世にさかのぼりうるものは、2基の井戸（SE120・SE130）などごく少ない。中世の遺構はいずれも12世紀後半～13世紀前半に位置付けることができ、これは周辺における調査事例と比較しても矛盾はない。

今次調査地点が砂丘の高所にあたること、そして中世以前の遺構は井戸等、掘りこみの深いものしか残っていないことを考えれば、中世以前の遺構は、削平により既に失われてしまっている可能性が高いものといえるだろう。

箱崎 32

― 箱崎遺跡　第53次調査 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第996集

2008（平成20年）年３月31日発行

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　ソウヤマ印刷

福岡市博多区中呉服町10－5

遺跡略号　調査番号
HKZ－53　0650

福岡市埋蔵文化財調査報告書第九九六集　二〇〇八

福岡市教育委員会